

■高校野球のケーススタディー（第12回）■



高校野球のケーススタディー
～こんなプレイどうなるの？～

一般財団法人兵庫県高等学校野球連盟

高校野球における公式試合や練習試合の中で生じたプレイの中で、“こんなプレイ、ルールではどうなるの？”といった疑問について、ルールの側面から解説します。

○9回表同点に追いつき、なお攻撃中で日没コールドゲーム・・・さて勝敗は？

令和2年8月6日に札幌円山球場で行われた南北海道の独自大会でのことです。

8回裏終了し、後攻のS高校が8対10でリードしていました。9回表に先攻のR高校が2点を取り10対10の同点。なお、1死満塁の時、審判員が集まり協議。そのまま、日没コールドゲームとなり、8対10で後攻のS高校が勝利を収めました。9回表に同点に追いつきましたが・・・勝敗はどのように決まるのでしょうか。ルールに沿って確認してみましょう。

チーム \ 回	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
R高校	1	3	3	0	1	0	0	0	(2) 攻撃中	8
S高校	1	0	4	1	0	2	1	1		10

●まず、このゲームは、「正式試合」であるかどうか確認してみましょう。

公認野球規則 7.01(c)(1)では、5回（※高校野球では7回）の表裏を完了した後に、球審によって打ち切りを命じられた試合（コールドゲーム）は正式試合となることが規定されています。

※高校野球特別規則「正式試合の成立」

審判員が試合の途中で打ち切りを命じたときに正式試合となる回数の規則 7.01(c)については、高校野球では5回とあるのを7回と読み替えて適用する。

したがって、このゲームは、7回表裏を完了しているので、ノーゲームとはならず正式試合として完了していることが分かります。

●次に、得点はどのように決まるのか確認してみましょう。

公認野球規則 7.01(g)(4)【注】では、次のように規定されています。

正式試合となった後のある回の途中で球審がコールドゲームを宣したとき、次に該当する場合は、サスペンデッドゲーム（一時停止試合）とししないで、両チームが完了した最終均等回の総得点でその試合の勝敗を決することとする。

・ビジティングチーム（先攻チーム）がその回の表でリードを奪う得点を記録したが、表の攻撃が終わらないうち、または裏の攻撃が始まらないうち、あるいは裏の攻撃が始まってホームチーム（後攻チーム）が同点またはリードを奪い返す得点を記録しないうちにコールドゲームを宣せられた場合
また、高校野球特別規則「サスペンデッドゲームの取り扱い」では、次のように規定されています。サスペンデッドゲーム（一時停止試合）は、高校野球では適用せず、両チームが完了した最終均等回の総得点でコールドゲームとして試合の勝敗を決する。

したがって、この試合では、9回は完了しておらず、最終均等回である8回までの総得点「8対10」をもってS高校が勝利を収めることとなりました。

なお、このゲームでは、試合の中断時刻が18時40分だったそうですが、札幌の日没時刻が18時50分であったことからすると、かなり薄暗く、試合を継続するのはかなり危険な状況であったことが伺えます。

この試合は、日没コールドゲームとなりましたが、降雨などの天候によってもコールドゲームはあり得ることですので、「正式試合」に関するルール（規則7.01）はよく知っておく必要があるでしょう。

●参 考

今回は、最終均等回の総得点でもって試合の勝敗が決まったケースを紹介しましたが、コールドゲームは、原則として打ち切りとなったときの両チームの総得点により勝敗を決することとされています。（規則7.01(g)(4)本文）

コールドゲームにおける得点のパターンについては、公認野球規則の巻頭(10)(11)頁において14個の例示が挙げられていますのでこの機会に確認しておきましょう。（今回のケースは、【例13】に相当します。

【規則7.01(g)(4)【注】②）

表題デザイン協力：兵庫県立姫路工業高等学校デザイン科
坂田 朋葉さん（3年）
飛田 紀香さん（3年）